

# 転位する身体と「書くこと」の諸相

— カフカの『断食芸人』論の序説として —

木 下 直 也

## 1. カフカにおける身体と言語—欲望の欠如と「力の過剰」

「直観」(intuitus)をも、「意識」(conscientia)し「認知」(perceptio)する自己の「知性」(intellectus)の働きとして「私」の主體的思考(cogito)のうちに取り込み、人間存在の根拠としたデカルトの哲学は、近代思想の方向づけに多大な影響を与えたとは言え、それは結果として精神の身体からの切り離し、身体の知への従属になったと言えるだろう。そして、力(Macht)としての身体性を解放することがニーチェにとっての、そして抑圧された無意識(Unbewußtsein)を解放することがフロイトにとっての近代の閉塞から抜け出るための契機だったと、まずは哲学・思想史の流れにおける近代の入口と出口の状況について大まかに言っておく。しかしながら、大衆社会の時代を迎えると、近代的思考や行動様式の価値基準の束縛から身体性を解放することは、およそ無限に続きうる欲望のうちに個体の解放の幻影が潜行することとなっていく。それは実際は他者の欲望を模倣しているのに、まるで自己の欲望を充足しているように感じられるような消費社会の状況に馴致することを意味しており、他者によって操作されているのに、個体が自発的に自由を更新しているように思われる逆説的状況がそこにはある。「自発的な要求の個人主義ではなく、他律的欲望の個人主義」<sup>1)</sup>がそれである。他者との差異において自己の個性を提示しようとする行為も「多数者に対抗する同じ人物を媒介者を選ぶ人々は、自分自身は多数者と

1) 作田啓一『個人主義の運命』岩波新書第二章。以下の引用も同様。

異なっていると信じているけれど、相互に類似してくる」から「差異の表現は結局は類似の表現となる。」このように均質化した社会は、欲望が媒介となるだけに、また近代個人主義の長期にわたる理念も目標も不要な短いスパンの消費や遊戯的競争原理を基礎にしているだけに、統括的な規則や倫理による束縛がなくても、かえって管理社会の秩序は堅固なものになっていく。「他律的」であるにもかかわらず「個人の欲望」に価値をおく「欲望の個人主義」では、「欲望がいったん発生したのちに外的あるいは内的検閲によって統制を受ける」こともないからである。「社会の統制が媒介者を通して最初からビルトインされている、というイメージがゆきわたっている」ために「人は欲望を抱けば抱くほど社会化され」てゆき、「媒介された欲望がこのように社会と調和しうるのは、媒介者が行為する主体の周辺のどこにでも見出せるような他者」だからである。

カフカも、現代まで続いているこうしたポスト近代の大衆社会の状況にすでに身をおいていた。「破壊できないものはひとつである。ひとりひとりの個人がそれであり、同時にそれはすべての人に共通している。それ故に人間同士は例外なく分かちがたく結びついている」<sup>2)</sup> という文は、寓意的であるだけに、ネガティブにもポジティブにも取れ、多様な解釈を許容しそうだが、上記のような個々人の自由を受け入れるが、同時に全体が管理されているような時代の状況論に重ねてみることも可能であると思う。

メルロ＝ポンティはこう言う。

他者の身体を問題にするにせよ、私自身の身体を問題にするにせよ、私が人体を認識する唯一の手段は、自らそれを生きること、つまりその人体の関したドラマを私の方でとらえ直し、その人体と合体することだけである。したがって私とは私の身体である。すくなくとも、私が入一つの既得物を身につけており、逆に私の身体が入一つの自然的な主

---

2) KKANS II 66

体として、私の全存在の一つの暫定的スケッチとして存在するまさにその限りでは、そうなのである。<sup>3)</sup>

身体とはある不可視の何ものかなのであり、だから身体性の解放と言っても、身体は何が解放なのかは自分自身で知ることはできない。言わば、身体は何も書かれていない白紙のようなものであり、だからこそそこに書かれ得る「ドラマ」を求めて何かに指示を仰がなければならない。それ故に、欲望という次元についての場合の身体は、無意識にそうする場合が多いにせよ、ある言語(的指標)に従った場合、その経験を「一つの既得物」と感じ、それがいかにも欲望にふさわしく「自然的な主体」の選択と感じられるために「全存在の一つの暫定的スケッチ」と一体化するのである。

次の論文で扱う予定のカフカ晩年の作品、『断食芸人』は、断食が主題であることからわかるように、社会状況の内部にいるものとして、身体の通常の欲望に合致した使用法を拒否した人間を主人公にしている。つまり主人公は、「食べる者」(社会の中に在ることを維持しようとする身体)、および「語る者」(言語コミュニケーションにより社会的関係性の中に置かれようとする主体)であることを欲せず、その外部に立とうとする。このような身体は、社会の側から見れば、「欠如」を内包しているのだが、カフカにおいてはむしろ「過剰」であり、この過剰は言語行為と強く結びついていることに注意しなければならない。カフカは日記の中でこの「過剰」について次のように言っている。

僕にはいつも不可解に思えることとして、書くことのできるほとんど誰もが、苦痛の中にあって苦痛を客観化することができるということがある。例えば僕なら、不幸の中でまだ燃えているような頭を抱え

---

3) モーリス・メルロ＝ポンティ『知覚の現象学』竹内芳郎・小木貞孝訳 みすず書房 325 頁

ながらもしかしたら椅子に座り、書くことで誰かにく僕は不幸である>と伝えることができる。いや、僕はさらにそれを超えたところまで行くこともでき、不幸とは何も関係なく見える才能に応じた美辞麗句で、シンプルに、あるいは対句を使って、あるいは連想のフルオーケストラを伴って、それについて空想のままに書くことができる。けれど、これは決して嘘ではないのだが、それは苦痛を鎮めはしないが、苦痛が引つ搔いている僕の存在の根底まであらゆる僕の力を消費し尽くしたことがはっきりしたその瞬間の、ただ恩寵のような力の過剰 *Überschuß der Kräfte* なのだ。だとすれば、それはどのような過剰なのだろう？<sup>4)</sup>

つまり、身体感覚に対応する言葉が存在しそれを誰もが使えるのだが、にもかかわらずその言葉は、身体感覚の実態を結局は代替することができないのである。何気ない日記内の記述だが、ここにはソシユールの意味での言語の「恣意性」の問題が潜んでおり、言葉によって身体感覚の実態を表現しえたと思わせる「惰性態」としての言語が流通しているからこそ、一方で身体と言語との乖離が実感されるわけである<sup>5)</sup>。

---

4) KKAT 834

5) ソシユールの名が出たところで、このことに丸山圭三郎の次の文を重ねてみたい。「今の私たちに要請されることは、一切の現象がコトバの産物に過ぎないことを知ってこれを徹底的に相対化すべくひとまずは<唯言論>に立ち、ついすべてのドクサの根源であるウア・ドクサとしてのコトバをも相対化すべくその根拠を次々と剥奪するというウロロボスの行為を永続的に繰り返すことによって、生(レーベン)の全き無目的性と盲目的な力と対峙し続けること以外にないであろう。次章において展開する<唯言論>は、こうした終わりなき営為の、あくまでも最初ステップに過ぎないことをあらかじめ断っておきたい。」(丸山圭三郎著作集Ⅳ 岩波書店 48-49頁。傍点は著者による。)カフカは自己保存のためにひとまずは「書き続ける」しかないのだが、その書く行為に何か目的があるわけではない。その無目的性ゆえに、書いたコトバはすぐさまその根拠を奪われ相対化されるが、それは上位にあるウア・ドクサとしてのコトバ自体の根拠の不在を認識することでもある。そして同時にそれと融和できずに対峙し続ける生(レーベン)の「盲目的な力」を「過剰」として意識することにもなる。

カフカにおける身体性とは、ここで言われている「力の過剰」、即ち言語の使用と同時に生じるが言語と融和不可能で、感覚としてはあるが宗教的な超越性にも取り込まれない実体はない宙に浮いた情動のようなものである。だからこそ、カフカ自身もそれに対して「それはどのような過剰なのだろう？」と自問するほかはない。この過剰分がなければ、定量の力を生活に有効なように配分しうるので、その過剰は「苦痛」の源泉でもある。しかし一方でその力は「存在の根底まであらゆる僕の力を消費し尽くし」てもなお余ってしまう喜びの絶対値をも与えているのだが、その力の管轄が自己の決定権の範囲内にはないため、その出自に対しては疑問符に委ねたままにしているのである。

この「過剰な力」が無限に書くことへと向かわせる原動力であると同時に、書かれた言葉と乖離しているという分裂した状態を、カフカはすでに早い段階から意識していた。

僕が頭のなかにもっている途方もない世界。でもどのようにして自分を解放し、そして引き裂くことなくその世界を解放するのか。しかし、その世界を僕のなかに抑え込んだまま埋もれさせてしまうよりは、引き裂く方がはるかにいいのだ。何と言ってもそのために僕はここにいるのである。それは僕には全く明らかなことだ。<sup>6)</sup>

「途方もない *ungeheuer* 世界」という言葉で何がイメージされているかはわからないが、「自分を解放する＝自由にする」*befreien* することがなぜ必然的に引き裂かれた内的状況をとともなうことになるのだろうか。「世界」と言われているものは、私的な個人的な世界であると同時に、自分が住まう社会環境としての世界でもある。しかし、ここには「反-（アンチ）」の立場がない。「君と世界との闘いにおいては世界の側を支持せよ」<sup>7)</sup> とい

---

6) KKAT 562    7) KKANS II 124

う名高いアフォリズムを重ねてもよい。世界に依存しなければ生存していけないが、かと言って世界に馴致することもできないから、馴致か分裂の選択へと追い込まれ、分裂を選ぶしかないのである。なぜなら、言語自体が自己固有のものではなく、他者に所属するものであるが、にもかかわらず自己の使用できる言語はその他者の言語しかないからである。他者の言語によって自己固有のもの(=「力の過剰」)を守るという最初から相容れない二つの分裂した世界を抱えた精神状況がそこにはある。集団の中に「破壊できないもの」があるからこそ(引用2)), また「自分を解放すること」が「欲望」の解放へとすり替わり、それが「他律的欲望の個人主義」の均質化への馴致を迫られる逃げられない状況における選択は、自己の分裂という一つしかありえなくなるのである。

別の箇所ではこのことは次のように表現されている。

今日の午後、孤立感からの苦痛があまりにも浸み込むように張りつめたように僕の中に入ってきたので、僕の力はこのように消費されているのだと気づかされた。その力は、こうやって書くことによって得るのだけれど、本当はこの目的のために用意していたものではなかったのだ。<sup>8)</sup>

ここで言われる「力」**Kraft**の二重化された意味に注意したい。本来なら現世的生活に馴致して、「過剰」になることなく日々適切に配分されるはずの「力」がここでは「書くこと」に使われている。しかもその力は「書くこと」のよってのみ現れるのにもかかわらず、同時に書かれた言葉とは切り離されて保持されることが感じられる超越的性格を帯びているから、この力は「苦痛を鎮めはしない」が「恩寵のような」「過剰」として意識されるのである(引用4))。

---

8) KKAT 219

そしてさらに、惰性態としての言語が、最初に述べた「他律的欲望の個人主義」と重なるからこそ、「食べる」こと、「語る」ことに与しない断食芸人のスタンス（それは、カフカが菜食主義者だったこととも関連するが、そこに意味を見出しすぎることも避けねばならない。得てして思想的な意味を担いがちな「菜食主義」とカフカにとっての「書くこと」はまた違った多様性を持っているからである）が意味をもってくる。日記の中で、カフカは自らの身体に課した「欠如」について次のように言っている。

全く明らかなことだが、僕の中には書くことへと向かう集中力を知覚しうる。書くことが、僕の本質のいちばん成果に富んだ方向であることが、僕という有機体の中で鮮明になった。すべてのものが押し寄せてきて、性欲や、食べたり飲んだりすることや、哲学的思索や何よりも音楽、これらの喜びに向けられていたあらゆる能力<sup>から</sup>を空にしてしまった。僕は、これらすべての方向に対して身をやせ細らせてしまった。これは必然的なことだった。なぜなら、僕の諸力は全体においてあまりに微小だったので、書くという目的のためにのみ集められることよってのみ、何とか中途まで利用することができたのであるから。<sup>9)</sup>

カフカが彼の諸欲望をただ書くことにのみ転移させていることに注意したい。先ほど述べたように、「力の過剰」は言語を受け容れないけれども、同時に言語を使用することで立ち現れてくるのだとすれば、6)の引用で検討したように、書き続けながら同時にその「力の過剰」を言語の汚染を逃れた聖域として守るという分裂状態しか生存のための選択肢がないのである。書くことが他律的欲望が支配する惰性態としての社会に馴致することはありえないが、かと言って書かないことは「力の過剰」を表すことが

---

9) KKAT 341

できないまま、生きながらの廃人と化すことを意味するからこれもまたありえない。それ故、唯一の選択肢へと追い込まれてしまうのである。

この引用で言われている諸欲望は、社会の通常の生活における使用法に重なることを回避されたという点では「欠如」なのだが、「力の過剰」として別のものへと昇華させられている限りは「充溢」である。「空<sup>から</sup> leerにする」とか、「身をやせ細らせる abmagern」といった表現が、身体の原生的欲望を抑制する代わりにその「欠如」を別のもので満たそうという転位した欲望を示唆し、またそれはすでに書くことと結びついた「断食」を暗示している。「性欲」の欠如は女性に手紙を書くことへの欲望へ、また最後期の作品に引きつけて言えば、「食べたり飲んだりすること」の欠如は『断食芸人』を書くことへの欲望へ、「哲学的思索」の欠如は『ある犬の研究』を書くことへの欲望へ、そして「何よりも音楽」の欠如は『女歌手ヨゼフィーネあるいは鼠族』を書くことへと転位・昇華させられ、それぞれ、地上の生活においては不可能な完全な結婚の瞬間へ、完全な食事への瞬間へ、完全な解答への瞬間へ（だから『ある犬の研究』は最初から最後までとにかく疑問文が多い）、完全な音楽の享受の瞬間へと向けて開かれたままになっている。（これに、もう一つ「睡眠欲」の欠如をあげることができる。カフカはたえず不眠を嘆きながらも、たまに眠れることがあると、これでもう書けなくなるのではないかと恐れている。）

そして、例えば「飲食欲」の欠如は、カフカに次のような文を書かせることにもなる。

僕が一度胃の調子がよいと感じるや、ほとんどいつでも抱く、食物について恐るべき大胆なことを想像することで自分をいっぱいにしたという欲望。とりわけ、燻製店の前でこの欲望を抱く。ソーセージを見て、商標で古くて固い自家製のものだとわかると、僕は空想の中で全部の歯を使って噛みつき、機械のようにすばやく、規則的に、わ



き目もふらずに呑み込む。この想像の中での行為自体は絶望的な結果をもたらすため、僕は急速に煽り立てられる。あばら肉の長くて堅い皮を噛まずに口の中に入れ、胃や腸を引き裂きながら通し、また尻から引っ張り出す。汚い食料品店を僕は空になるまで完全に食べ尽くす。ニシンやキュウリやその他腐って古くなり鼻にツンとくるような食べ物で腹をいっぱいにする。ボンボンはブリキの缶から霰<sup>あられ</sup>のように僕の中へと注ぎ込まれる。これによって僕は、自分の健康な状態ばかりでなく、痛みもなくすぐに消え去ってしまう苦しみを楽しむ。<sup>10)</sup>

少々マゾヒスティックでグロテスクな妄想であるが、現実の食欲が奪われているがゆえに、その欠如を想像上の食事において際限もなく埋め尽くそうとする言葉の群れ。この一種の倒錯的な書くことにおける欲望の解放は、「性欲」についても当てはまる。

いっしょに生活するという幸福の罰としての性交。できる限り禁欲的に生きること、独身者よりももっと禁欲的に。これが僕にとっての唯一の結婚に耐えるための可能性だ。しかし彼女は？<sup>11)</sup>

恐るべき転倒ぶりである。これがフェリス・バウアーとの結婚を前提に言われている言葉なのである。結婚における身体の相互一体化としての性交は「僕の本質のいちばん成果に富んだ方向」の極限である書くことによる（つまり無限に言葉を送り続けられる「手紙」による）結婚への欲望を萎えさせてしまうがゆえにそれは「罰」なのである。だからここでも、禁欲とは現世的欲望としての性欲を回避する、いやむしろ上回る「力の過剰」の持続への欲望の変形であり、カフカがプロートに、『判決』の最後の文に

---

10) KKAT 210

11) KKAT 574f.

において、「激しい射精のことを考えていた」<sup>12)</sup>と言っているのもその意味において、つまり「書くこと=生」の極限としての作品の死=異化された身体が無化として理解される。

## 2. 転位する身体—健康と病気

こうした身体の使用法の転倒は必然的に健康と病気の関係も転倒させることになる。

僕が有用なことは何ひとつ学ばず—それと関わっているのだが—自分を肉体的にも駄目にしてしまったことへの裏には、ある故意があるかもしれない。僕は気を散らされずにいたかったのだ。有用で健康な一人の男の生の喜びによって気を散らされたくはなかったのだ。現実には、病気と絶望とに少なくとも同じくらい気を散らさせられてしまうわけだが。<sup>13)</sup>

「有用」でないこと、つまり有用に効率的に使われる現世の一般的欲望のあり方を変形することに「関わって」いたため、カフカは「絶望」的な「病気」になってしまったのだが、「ある故意」には、あるべき「健康」には基準がないがゆえに、「他律的欲望の個人主義にとっては、無限に「気を散らされる」ことこそ、もしかすると不健康なのではないかというアイロニーが含まれているかもしれない。だから、同日の日記で、「僕自身の組織的破壊」*die systematische Zerstörung meiner selbst* は「故意でいっばいの仕業」*eine Aktion voll Absicht* と言われるとき<sup>14)</sup>、カフカは自ら望んで病気になったということになるが、それは、そういう現世的「健康」

---

12) Brod, Max: Über Kafka. Fischer Verlag 1996. S. 114

13) KKAT865

14) KKAT866

への欲望を、「悪魔」や「幽霊」の手を逃れた「健康」へと変形するために引き受けた「病氣」なのである。

疲れて眠りに入る前の時間は、幽霊どもから離れて無垢でいられる本来の時間だ。幽霊はみんな追い払われているが、だんだん夜が更けるにつれてやつらはまた近寄ってくる。まだよく見極めがつかないものの、朝には全員集まっている。さてそこでまた、健康な人間は毎日の幽霊の追っ払いを始める。<sup>15)</sup>

書いているといよいよ不安になってくる。どうしてかはよくわかる。すべての言葉が幽霊たちの手の中で方向を逸らされ——この手の振りが彼らに独特の動きなのだ——話し手に槍となって返ってくるからだ。<sup>16)</sup>

カフカの日記や手紙には、悪（悪魔）や幽霊についての記述、考察が多く見られる。先に述べたように、言語は他者の法、掟 *Gesetz* であるが、自らもそれに依存しているからこそ、書いているうちに、無意識に悪魔に加担し、自ら幽霊の仲間となる可能性がある。しかも「悪」は誰にもわかりやすいかたちで顕現することのほうが稀で、「悪魔的なものは、善のように見せかけることもよくあるが、それどころか全く善として具現することもある」から、「無垢でいられる」ためには、「健康な人間は」神経を集中させて、自らが発した言葉のうちに潜む「悪魔」や「幽霊」を「追っ払」わなければならないことになる。カフカは、「健康」の意味に、倫理的にあまりに正しくあろうとしたがゆえに、「病氣」が別の意味での「健康」の徴になるように病氣になったとも言い得る。病氣が偶発的なものであり、

---

15) KKAT899

16) KKAT 926

咽頭結核になったから事後的に考えを変えたという見解も出るだろう。しかし、病気でなかったときでも、たとえ咽頭結核になっても、それを病気とは考えず必然的な結果と見るような思考感覚をカフカがもっていたということが重要なのであり、病気はそのことの身をもつての証明となっている。カフカには「有用で健康な一人の男」は、ありもしない理想の健康を思い描きながら病気になるように適度に身体を飼いならして行く精神の病人なのであり、そのような意味での健康を書くことと結びつけば、それは、書いたり書かなかつたり（「食欲」や「性欲」や「哲学的思考」を時々織り交ぜつつ）、適度に生に明るさと翳りを与えていくような書き方になるだろう。一方カフカにとっては病気は身体を崩壊へと至らしめるものではなく、宗教的意味合いはないものの、社会や言語という制度に対しては超越的な一種の「恩寵」になっている。「力の過剰」（引用4）に対して「恩寵のような」gnadenweise という形容詞がついていたことに注意したい。

夕方はいつも 36 度 7 分、37 度 7 分。書き物机に座っているが何も出てこないし、通りへもほとんど出ない。にもかかわらず病気を嘆くことの偽善。<sup>17)</sup>

「……だから病気によってますます自分の虚弱さが、それとともに存在の奇跡が全域にわたって表示されるのです。」

「それでは病気は本来恩寵なわけですね？」

「その通りです。病気はわれわれに、自分自身を良く知る可能性を与えてくれるのです。」<sup>18)</sup>（『G. ヤノーホとの対話』より）

原始的な目で見ると、本来の反駁の余地のない、他の何（殉教とか

---

17) KKAT 925

18) Janouch, Gustav: Gespräch mit Kafka. Fischer Taschenbuch Verlag 1981. S. 127

誰かのための自己犠牲とか)によっても邪魔されない真実は肉体の苦痛だけである。最初の宗教の主人が苦痛の神ではなかったのは奇妙だ(たぶん、後にはやっとそうなったのだらうか)。どんな病人にもひとりひとり守護神がいる。肺病患者では窒息の神である。恐ろしいのは一体化の前に、すでにその神と関わっているのではないとしたら、どうして彼がやって来るのに耐えることができようか?<sup>19)</sup>

三番目の引用は意味あいが少し変わるが、カフカにとって恩寵としての「力の過剰」も二義的である。というのも、その力は彼の病気を晴れやかな精神の健康と結びついたものにし、あらゆる地上での悲惨をも享受できるものになっているが、同時にその力の超過分が現象世界との一体化を常に追い越してしまう限り、彼はこの世での生活から疎外される苦痛を蒙り続けることになるからである。この絶対的明るさと暗さ、無限の喜びと苦痛が、交代で起こるのではなく(交代で起こるのであれば、絶対とは言えないだらう)、同時に共存している同じことの名づけられない二面であることを踏まえておかないと、カフカが自分の病気に対し悟りきっていたということにもなりかねないし、またこの 18) の引用も理解しがたいものになるだらう。

頭がズキズキと痛く、頭の上をさっとかすめる枝が僕には最悪の不快感になる一方での僕の穏やかな歩行。僕は他の人々と同じような穏やかさや確かさを持っているが、どういうわけかそれが結局は逆さまのものになってしまう。<sup>20)</sup>

身体的苦痛は精神的「穏やかさ」Ruhe を阻害するのが一般的であるの

---

19) KKAT 899

20) KKAT 537

に、その両者が共存しているという「転倒した」、「逆さまの」*verkehrt* 関係は、カフカにおける「病気」と「健康」の関係の特異性を物語っているだろう。しかし、特異性と言っても、「穏やかさ」や「確かさ」自体が特異なものではなく、むしろそれは日常生活で他者と共有できるものであるのに、質的変異を遂げてしまうことが自分でもわからないからこそ、その特異性に対して、「どういうわけか」*irgendwie* という、自分でもその事態を理解できないのに不可避免的にそうになってしまうという率直な驚きを発しているのである。

練り上げた文ではない日記の中の記述ではあるが、ここにもカフカのズレや歪みを見ることができる。一つ目の文における「穏やかな」*ruhig* はすでに「逆さまの」*verkehrt* 関係におかれた「穏やかさ」であるが、二つ目の文では、他者と共有できる「穏やかさ」*Ruhe* である。つまりここでは、他者の普通の生活に見出せるような、日々の「穏やかさ」や「確かさ」*Sicherheit* は自分にも共通するものなのに、いつの間にかそれが違うものになってしまうということが、言葉としても実態としても、「穏やかさ」*Ruhe* の一語のもつ二重性として示されている。「結局は逆さまのものになってしまう」と訳した部分 *am verkehrten Ende* は「逆さまの *Ende* で」、つまり「終わり＝行き着いた先で」の意味でもあり、一つ目の文の「僕の穏やかな歩行」*mein ruhiger Gang* に対応していて、つまり、「他の人々と同じように」歩いていたら、「どういうわけか」道が徐々に逸れて「逆さまの (あるいは裏側の)」袋小路のような行き止まり *Ende* へ行き着いたというイメージと繋がっている。それは、引用6) で検討したような、世界に馴染できない場合は自己が分裂するしかないということでもあり、だから *Ruhe* の意味も二重になったり一つになったり、境界領域で不安定に揺れることになるのである。

さて、ここまでカフカにおける身体、言語、欲望、健康と病気などの主題について考察をしてきたが、以上を前提として、カフカの晩年の作品

『断食芸人』を中心としたいくつかの作品の意味を解明してみたいが、それは次回の課題として、ひとまず本論をここで終えることとする。

\* \* \* \* \*

カフカのテキストからの引用にあたっては『批判版カフカ全集』*Kritische Kafka-Ausgabe* を用いた。本論では小説などの実作品からの引用はなく、日記、ノート類からの引用のみであり、使用したのは以下の二つのテキストである。引用箇所には略号、ページ数を記した。

Kafka, Franz: *Tagebücher*. Hrsg. von Hans-Gerd Koch, Michael Müller und Malcom Pasley. Bd. I: Text. New York/Frankfurt a.M. 1990 = KKAT

Kafka, Franz: *Nachgelassene Schriften und Fragmente II*. Hrsg. von Jost Schillemeit. Bd. I: Text. New York/Frankfurt 1992 = KKANS II